

分團保育の試み

東京女子高等師範學校
附屬幼稚園保母

池田とよ

分團保育！ 幾度も伺つた言葉でありながら、尙それでも何となく自分には遠い、手の届かぬ空の星見たやうな氣がして、よいにはきまつて居るが、先づそれは美しい理想と祭り込んで、實際にやつて見ようと、切り込んで見なかつた。

子供が部屋に入る時は全體が一緒に入る、庭に出る時は全體が一緒に出る、部屋が満員である時庭には寂寞の感がある、庭が繁昌する時、部屋には机も椅子も暇そうに退屈そうに、淋しそうに、置かれたまま動きもしない、ガランとしてゐる。かくして何もかも全體一緒である。それで、

□子供はいつも必要以外の友達が餘りに多いので、どうも落付いて遊ぶ事が出来ない、のどかに遊ぶたくても偶には喧嘩もしなければならなくなる、玩具の奪ひ合ひもしなければならなくなる、餘計な競争も起る。と云ふ風で、どうしても、しんみりと或遊

びに没頭して、じつくりと、周圍から何の妨害も受けずに思ふ存分遊ぶと云ふ事が困難な場合が非常に多い。此ソワ／＼した、落付きのない、上かすりの生活が毎日繰り返して行はれるとしたならば、子供の性格にどんな傾向を興へるであらうか、そこに考へ到る時、どうしても心配せずには居られない、傾向は單に傾向だけに止まらぬのである。勿論子供の中には左程影響を受けぬものもかなりにあるには相違ないが、影響を受ける人が、たつた一人あつてもそれは決してよい事では無い。

□先生は先生で、一人で三十人も四十人もを一緒に遊ばせると云ふことは、一通りの骨折りではない殊に従来の普通のやり方で、何か計畫のもとにさせようとする時は、なか／＼大變である先づ始める前に全體の子供を一寸は静めなければならぬ、子供の手を持つてゐる草花を預つたり、顔を先生の方に向けさせたり、手を膝に置かせたり。一方を静めれば

一方が騒ぎ出す、次から次へと騒いで廻る、静めて廻る、はてしがない、困つた末は、其騒ぎを唱歌にでも引寄せて二つ三つ歌はせて、やつと纏めると云ふ風、こんな事に使はれては唱歌も随分迷惑するであらうと思はれる。ともかくもこうして一通り纏めるに先生は大分骨が折れる、一生懸命の努力が必要である、漸く静めて何か始めたとなると、何とか、かんと云つて子供は騒ぐ、三人や五人ならば少しも差支へのない、むしろ自然の事であるが、三十人四十人となると、先生も黙つては居られなくなつて、氣の毒がりながら禁止に可なりの骨を折る、實につまらない事である。こんな事で先生は疲れて仕舞ふ。無駄骨折である。實際靜かに考へて見ると、幼稚園で仕方なしに發する無意味な禁止の言葉は子供が犬勢すぎるが爲である場合が可なりに多いと思ふ、その爲に先生の大切な精力を浪費すると云ふ事は實に惜しい事である、勿體ない事である。

□又先生と子供との關係から云つても、一人の先生が、いつも大勢の子供に同じやうに、淺く、廣く、觸れると云ふことは如何にも物足りない感がある、子供としても毎日、淺く先生に觸れるよりは、何日か

の間に一日、或は一日の中に何時間か深く、思ふ存分にぶつかつて方が、どんなに幸福だか知れない、其時はじめて先生と子供との眞の親みは味はれる、幼児教育にも最も大切な人格と人格との眞の接觸は實に此時に於てである。

かう云ふ風に全體を一緒にする場合は、子供の方面にも、先生の方面にも、又子供と先生との關係に於ても困る點が多い。どうかして之等を救ふ方法はあるまいか。全體を一緒にして置いて、しかも、もつと子供に本眞劍な、じつくりした、しんみりさを味はせたいと思つても、それは可なりに困難な事である、然しどうかして少しでもそうさせたいと云ふので、種々な方法が考へられるであらう、其先生の人格の力を、案出せられた方法と、熱練とに依つて可なりに高い程度まで其目的を達する事が出来るけれども、これは子供としては多少不自然な生活をする場合を作る。のみならず先生としても非常な、しかも餘計な努力を要する場合が少なくない。此不自然な生活や、餘計な努力をしないで此目的を達し得る方法があるならば、それに越した事はないと思

ふ。ここに至つて、とう／＼「兎に角、やつて見ませう」と、全園擧つて分團保育の入口を覗いたのは此五月の中旬であつた。

幸にも此幼稚園には保育練習生の方が居られるので、此場合非常に好都合であつた。

先づ各組に於て、其子供を先生の數だけに分けて三或は四の小さい集團を作つた、其各集團の子供の數は七人から十人位であつたが缺席者が毎日あるので實際は、それよりも少なかつた。遊戯の様なものも全體でする場合が多かつたが、其他は凡て各集團を單位とした、勿論鐘なんか打たないで勝手にいろいろな時間にするのである、初は精密な時間割の様なものを作つて、そのなす時間と場所と事を定めて置いて、それに依つてした。藤棚の下、クローバーの庭、東屋のもと、小山の麓、木立の蔭、裏庭の畑のほとり、花壇のそば、堤の上、遠征しては本校の庭と云ふ風に比較的靜かな他から成べく邪魔の入らぬ落付きのよい場所を撰んで各其本陣を定めるのである、机を持ち出すのもある、椅子だけのものもある、中には蘆を敷くのもある。此所に一まとゐ、彼所にも亦一まとゐると云ふ工合に小さなまとゐが幾つもの

／＼可愛らしく集まつて何だかをして居る、又他には自由に駆け廻つて遊んで居る五六人もある、砂場に汗を流して電車ごっこをして居る一群もある、遊戯室にはピアノの音がゆかしく響いて居る、唱歌の軟かい聲も聞えてゐる、部屋の入口の戸をそつとあけて見ると、此所にも五六人が一生懸命に何だかをして居る。靜肅を注意する爲に部屋の入口に「參觀謝絶」の札さへ掲げられる事がある。此時大人は勿論子供でさへも妄に其部屋に入ることを互に達慮するのである。

此靜肅に關係のある事であるが、此幼稚園では從來子供に廊下を駆け廻る癖がある、しかも靴を履いて居るので其音は大したものである、其爲これ迄靜肅を破られる事が多かつた、駆けさせまいと止める、暫くは駆けぬが、やがて又駆け出す、子供として駆けると云ふ事は無理からぬ事でもあると思ふ大人の目前の同情から、つい約束が弛む、子供はどうしても駆け廻る事を止められなかつた、がこう駆けられては一方の折角の苦心も水の泡である、又子供の作法としても廊下と部屋だけは駆けない方がよい、一時は苦しくとも習慣となれば何でもない事であると云

ふので此頃、廊下と部屋は、駈け、ない、と云ふことを子供と堅く約束した、駈けた場合にはどしどし注意した時々忘れると見えて駈けてゐる、「某さん」と云へば「ああさうだつた」と云つた様な顔を舉げてにこ／＼しながら止める、早くと思ふ時にも駈けないで少し俯向加減に急ぎ足に歩いてゐるのを見る時には實にしほらしい様な感じがする、此頃でも駈ける人が時々は勿論ある、殊に年の小さい人はそうであるがそれがいかに耳に響くのを見るとそれだけ周圍が静かになりかかつて來たのであろうと思はれる。

先づかう云ふ風にして分團保育と廊下を駈けぬ事との二つを毎日々々繰り返して居る内に先生も子供もだん／＼と其状態に馴れて來た。初めはとにかく定めた通りに小さく分けると云ふ事にのみ務めたので、其方法が未熟な爲、時には不自然な點も随分あつたし、木に竹を繼いだ様な變な所もあつた、又いろ／＼な準備に可なり混雜もした、そしてそこに或一種の物足なさを感じたが兎に角分ける事が毎日の保育の常態となつた。先生は所謂「管理」と云ふ方面の無駄骨折がすつかり無くなつた、子供を静めようとか、纏めやうとかそんな方面に精力を浪費する必要が無くなつたのでいかにもゆつたりと深く子供

に接する事が出来る。子供は自然的に餘念なくしんみりと遊ぶことが出来る。勿論時によりては子供がどうしても落付き得ない場合もある、先生がまごつく事もある、全く失敗に終る事も澤山にある。しかし大體として頗好結果である。實際静かな部屋や、朝露の輝いた、しつとりした庭で、幾つも小さい子供の小さいまとゐるが何か一生懸命にして居るのを見る時、そこに一種のけだかさと輝とを感せずには居られない。幼稚園全體が何となく物静かで、子供の數が少なくなつた様な氣持がする。

ここ迄になつて來ると、こん度は今迄に何となく感じて居た物足りなさに切り込んで見たくなる、兎に角此習慣を作るために分團保育を計畫的にすると云ふ事は當然の順序ではあるが、其れについて或點に物足りなさを感するのである。即其集團の作り方である。子供が勝手に友達同志で遊んで居る時、自然に作られた集團は實に理想的なものである、仲間と場所と事とを全然自由に選擇して、全然自己から出た遊をして居る。此中には不自然もなければ矛盾もなく、したければする、よしたければよす、何もかも絶対に子供自身の者である、そして子供は全く

本真劍に遊んでゐる。私共のなす分團保育の集團もどうかして斯かる性質のものにしたい。しかし實際馴れない内は砂遊に熱中して居る子供を何でもかでも畫方の組に連れて行つたり、おばさんごつこに夢中になつて居る人達をとんでもない粘土の組に呼んで來たりして不自然なまともを作らせてゐる。此場合子供は大抵は其提供せられたものに對し相當の興味を持つ様であるが、然し子供が各自の興味を基礎として自ら作つたそれとは大に其尊さを異にして居る。それで子供が自ら此理想的なまともを作つて居る場合、其子供に對する其日の保育の全計畫を潔く打ち捨てて其遊を繼續させて行く様に注意したいと思ふ。それと同時にかかる理想的な機會を捕捉する他に計畫的に分團保育を行ふ場合も、せめて其集團の作り方を全然先生のみで計畫とはせず、子供に興味に基いてして見たいと思つた、それで余りよい方法とも思はないがまづこの様な事をして見た即子供が朝登園した時、「これ／＼の中は何をなさいますか」と各兒に撰擇させた、そして普通其同種類のものを集めて各集團を作つた、かうなると子供は「撰ぶ」と云ふことに興味を持つて來る、「先生今日は何と何とがありますか、僕粘土がしたいなあ」先生私

けふは昨日のあれをします」と云ふ風になつて來る今日の事ばかりか明日の事まで定めて歸る人もある或日出勤の途中、電車を降りるとすぐに子供に逢つた顔を見るが早いか「先生私けふはあの團扇を剪ります」と、もうちやんと考へて居たらしい、又中には「私某さんとお飯事をします」と云ふ風に遊の種類と其仲間とを撰擇する人もある。かくして出來た集團は全然大人の計畫のみに依つたものに比して少しは自然的のものに近いものでは無かるうか。先生が保育上の或特別な計畫を設定して其れを分團的に行ふ事も勿論大切な事であるし、又或時は最後に述べた様な意味の集團を作つて見るのもよいかと思はれる

以上日頃の保育上の失敗と、分團保育についての淺い經驗の概略とを記して見たのである。

しかし之は相當な大人の數と、相當な場所と、よい氣候との三拍子が不充分ながらも揃つた場合の試みであつて、冬枯の吹き荒む冬の日、降り續く五月雨の頃などには、なか／＼に困難な計畫である。又一人で多くの子供を預つた場合、果して此分團保育が實行されるものであらうか。されるとせばどれ位の程度にまで出來得るものであらうか。